

Artbility meets 10 designers

～コラボレーションで生まれる新しい
魅力を提案

小高真紀子

10月30日から11月21日の期間、東京・

銀座のクリエイションギャラリーG8

で、「Artbility meets 10 designers」

を開催しました。ハンディキャップを

もつたアーティストと活躍中の若手グ

ラフィックデザイナー10組が、コラボ

レーションした作品を発表する展覧会

です。あわせてアーティストの原画も

75点展示しました。

19日間の開催で入場数は2,129

人。学生やデザイナー、イラストレー

ター、会社員、編集者、作家とそのご

家族、教育や福祉関係の方など、幅広

い層のお客様がギャラリーを訪れ、思

わず「きれい!」「すごい!」といっ

た声が聞こえてくるほどでした。

きつかけは、グラフィックデザイナ

ーの福島治さんからのお話からでした。

「アートビリティ」というアートライブ

ラリーがあつて、そこにはハンディキ

ャップをもちながらもすばらしい作品

を描くアーティストがたくさん登録し

ています。ぜひこの展覧会をギャラリ

ーでできませんか?」と。

展覧会の始まり

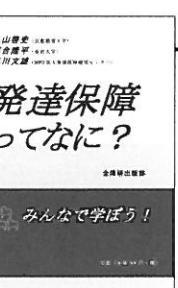
19日間の開催で入場数は2,129人。学生やデザイナー、イラストレーター、会社員、編集者、作家とそのご家族、教育や福祉関係の方など、幅広い層のお客様がギャラリーを訪れ、思わず「きれい!」「すごい!」といった声が聞こえてくるほどでした。

デザイナーとのコラボレーション

G8は、「デザインとコミュニケーション」を中心とした企画展を開催するギャラリーです。アートビリティの作

品をどう見せたらさらに魅力的になる

きつかけは、グラフィックデザイナーの福島治さんからのお話からでした。「アートビリティ」というアートライブラリーがあつて、そこにはハンディキャップをもちながらもすばらしい作品を描くアーティストがたくさん登録しています。ぜひこの展覧会をギャラリーラーでできませんか?」と。



全障研出版部
〒169-0051
新宿区西早稲田2-15-10-4F
定価(本体500円+税)
TEL 03-5285-2601
FAX 03-5285-2603

丸山啓史・河合隆平・品川文雄 著

ほんの森

評者 加藤直樹

発達保障ってなに?

1967年の結成以来、基調として「発達保障」を掲げてきた全国障害者問題研究会(全障研)が、一般向けのわかりやすい本を出版した。若い二人の研究者は発達保障の考え方の基本、歴史を担当し、ベテランの全障研前委員長品川文雄氏が自らの実践を執筆している。

本書の主張の重要な一つは「発達」の見方である。一般に「能力の高度化」が発達であるととらえられるが、発達保障では、それらを「タテへの発達」と呼ぶとしたら、「ヨコへの発達」があるという。より難しいことができるようになるだけでなく、多様な能力を身につけたり発揮できる場面が広がって、人との関わりが広がり生活に幅が出てくることも「発達」と主張する。

また、能力だけでなく、気持ちが育つ、価値意識が深まるなど、人格が豊かになっていくことも大切な「発達」と考え、力の獲得と人格の形成とを統一的にとらえる発達観を提起し、さらには、「自分らしい価値ある生活をつくっていく自由度が高まる」ことを重視し、生活や人生が豊かになっていくことにつながる「発達」を目指すことが重要であるとする。

つまり高齢者を含むすべての人の発達可能性を主張し、それを目指す取り組みが発達保障であるというのである。

「発達保障」は、50年あまり前にわが国

に収められた品川実践は、まさに発達保障の考え方を体現したもので、これだけでも発達保障の基本を学びうるものである。しかしそれは、多くの優れた実践と共通点をもったものであり、発達保障実践は特別なものではないともいいう。

本書あとがきで全障研委員長の荒川智氏は、新自由主義と新保守主義が席巻し、市場原理と自己責任の論理がはびこっている現在、それに対置し、「集団の発展」、「社会の進歩」を含む「発達保障」の理念と主張を今こそ広げていくべきことを述べている。まさに時宜に適した刊行である。

(かとうなおき 立命館大学名誉教授)